



書 評

術中輸液管理 key Points

末廣 浩一・編

術中輸液管理は周術期患者管理の根幹をなす管理項目の一つであり、しかも麻酔科医の裁量にすべてが任され、時にはその良し悪しが周術期の予後を左右すると言っても過言ではない。また、数多くの輸液管理法が提唱されては衰退していく進展の早い領域でもあり、もはや昔話となったサードスペースを考慮した大量輸液療法がその代表格である。したがって、常に最新の輸液療法の知識を麻酔科医は習得しておく必要がある。このような昨今の状況のもと、今回大阪公立大学の末廣浩一先生の編集で、最新の術中輸液管理をまとめた名著が誕生したのでご紹介する。

本書は大きく分けて輸液管理の総論と各論に分かれている。総論ではスターリングの原理やグリコカリックス、膠質液対晶質液の議論、目標指向型の輸液管理などの最新の知見に加え、心不全や腎不全、脳浮腫などの併存症や、臓器機能障害合併患者の病態生理とその輸液管理法が詳説されている。輸液を学び施行する際の基礎固めには最適な項目立てとなっている。各論では、臨床応用編と題され、症例呈示が最初になされていること

が大きな特徴である。心臓手術、消化器手術、呼吸器手術、脳外科、泌尿器科、脊椎外科、小児手術、帝王切開術などの細項目に分けられた新しい輸液管理法の解説は、ベッドサイドもしくは麻酔台の上に常に置いておきたいと思わせる内容である。また、敗血症や長時間手術、熱傷など各病態に応じた輸液実践法の項目があることも麻酔科医にとっては大変ありがたい。しかも本書は学術的にも必要かつ十分な最新の情報が随所に散りばめられているにもかかわらず、初学者にも親しみやすく、非常に読みやすい内容と構成になっていることは、編集者と一流の執筆陣のご尽力によるものと敬意を表させていただく。まさしく麻酔科医必携の書として本書を推薦させていただきたい。

(北里大学医学部麻酔科学 岡本 浩嗣)

B5 判, 224 頁
2024 年 6 月, 定価 6,820 円
克誠堂出版

